

# 第一稀元素化学工業株式会社

## デジタルトランスフォーメーションの基盤として SAP S/4HANA® Cloudを導入し、 海外の販売拠点へスピード展開

### 第一稀元素化学工業株式会社

#### 業種

製造・販売

#### 事業内容

ジルコニウム化合物を中心とした  
セシウム化合物、希土類化合物などの  
無機化合物の製造・販売・研究開発

#### 年間売上高

274億8,300万円(2019年3月期)

#### 従業員数

441名(連結、2019年3月31日現在)

#### 本社

大阪市中央区

#### URL

[www.dkkk.co.jp/](http://www.dkkk.co.jp/)

#### ソリューション

SAP S/4HANA® Cloud

#### 活用分野

財務会計、管理会計、販売管理、在庫購買管理

自動車排ガス浄化触媒や燃料電池をはじめ、多種多様な工業品に使われるレアアース化合物「高機能ジルコニウム」の生産・販売で、世界でもトップクラスの実績を誇る第一稀元素化学工業。同社では**グローバルビジネスのさらなる加速に向けて、個別に運用してきた海外の販売拠点のシステム統合**に際し、SAP S/4HANA® Cloudの導入を決定。2020年1月の中国・上海稼働を皮切りに、2022年までにすべての販売拠点のシステムのクラウド移行を完了する予定です。

#### 導入の背景

- 全社の経営課題であるデジタルトランスフォーメーション(DX)の実現
- その一環としての「グローバル基幹系再構築プロジェクト(D-Value)」の推進
- グローバルビジネスを加速する海外拠点の基幹系システムの統合

#### 導入成功のポイント

- リスクに勝るクラウドERPのメリットを社内に啓蒙
- オンプレミスとクラウドの「違い」を意識した導入アプローチ
- 「Fit to Standard」の徹底によるマインドチェンジ

#### SAP 選択の理由

- DXの推進基盤としてのクラウドERPの価値
- グローバル拠点へのスピーディな展開が可能なSAP S/4HANA Cloud
- 導入パートナーと実施したPoCにおける期待以上の成果

#### 導入効果

- サーバーなどの運用負荷が軽減し、情報システム部門がビジネスの価値創造への注力が可能に
- 四半期毎にアップデートされるSAP S/4HANA Cloudの最新機能をいち早く活用
- SAP S/4HANA CloudがDXにもたらす新たな可能性

## DXを支える基盤整備の一環として 海外販社へクラウドERPを展開

第一稀元素化学工業がSAP ERP (ECC 6.0)の運用を開始したのは2008年。2016年にはサーバー更改を実施し、この時点ではオンプレミスのECC 6.0の継続運用が決まっていたと振り返るのは、ICT統括室の室長を務める萩原成紀氏です。

「ECC 6.0のサーバー更改によって、当社のデータ規模を考えれば十分な処理性能を確保できたと考えていました。ところが、経営サイドからグローバルビジネスの加速に向けて、海外販社へのシステム展開の指示が出されたことで状況は一変しました」

一定の期間を要するオンプレミスERPの海外展開では、経営層の要求を満たすことはできません。そこで同社が白羽の矢を立てたのが、マルチテナントのクラウド環境で提供されるSAP S/4HANA® Cloudでした。

「SAPからの話を聞けば聞くほど、クラウドERPが私たちの目指す目標によりフィットしていることがわかりました。導入パートナーと実施したPoCにおいても、期待以上の結果が出たことから、本格的な導入プロジェクトの立ち上げを決定しました」(萩原氏)

また、同社ではかねてから「グローバル基幹系再構築プロジェクト(D-Value)」を進めており、ここにはデジタルトランスフォーメーション(DX)が重要なテーマであったことから、SAP S/4HANA Cloudの海外販社への展開もその一環として位置付けられました。

とはいえ、導入決定に至るまでには「当社のデータ規模であれば、それほどの効果はない」「マルチテナントでは、他社のシステムの影響を受けるリスクがある」など、情報システム部門内でもクラウドに対する抵抗感は根強くあったといいます。

「反対する人にはセミナーに参加してもらったり、SAP本社の技術者との質疑応答の機会を設けたりしながら、最終的にリスクに勝るクラウドERPのメリットをほぼ全員で共有することができました」(萩原氏)

## クラウドERPへの移行で不可欠な Fit to Standardによるマインドチェンジ

最初の導入拠点となった中国・上海では、2019年5月にプロジェクトがスタート。同年10月にはユーザーテストとトレーニングの段階にまで進むことができました。今後はアメリカやタイ、などの販社に展開を進め、2024年には日本本社、ベトナムの生産子会社を含めて、SAP S/4HANAおよびSAP S/4HANA Cloudに統一する予定です。

ICT統括室の三井里絵氏は「今回のプロジェクトでは、生産拠点にはSAP S/4HANAのオンプレミス。一方、販売会社にはスピード重視の観点からSAP S/4HANA Cloud MTE (マルチテナントエディション)という『2-Tierモデル(2層ERP)』を採用しています」と説明します。

また、同氏は今回のプロジェクトを通じて、従来のオンプレミスとクラウド(SAP S/4HANA)を比較した結果、以下の3つの違いやマインドチェンジの重要性が明らかになったと話します。

### 1. 制約の一方で、有効な新機能も多い

クラウドERPでは原則としてユーザー側で機能変更ができないが、SAP S/4HANAの場合、四半期毎のアップグレードで変更可能な範囲が増えている。最初から「制約が多い」とネガティブに捉えず、むしろ新たにリリースされる機能を積極的に活用する意識を持つことが重要。

### 2. Fit to Standardへのマインドチェンジ

マルチテナントでは「Fit to Standard」、つまりSAP標準の設定を使うのが原則。要件定義でも、よほど問題がない限りSAP標準を進めるマインドチェンジが重要。

### 3. 四半期毎のアップデートへの対応

SAP S/4HANAでは、四半期毎の自動アップデートの影響をあらかじめ想定しておく必要がある。またオンプレミスと違って「クライアント」の概念がなく、限られた環境で、本稼働後の保守運用と、他国展開を同時並行で行う必要がある。

## 全社のクラウド移行も視野に ビジネス創造の基盤として活用

海外販社へのSAP S/4HANA Cloud導入プロジェクトは、ようやく第一段階が動き出したばかりですが、早くも三井氏は「機能改善のサイクルが速く、システムが古くならない点はクラウドならではのメリットです。また、登録したインシデントについても、すぐに改善の対応をしてもらえます」と手応えを語ります。

またICT統括室では、情報システム部門がサーバー保守作業から解放されたことで、今後はマシンラーニングなどの最新技術を取り入れながら、新たなビジネス創造にも貢献していきたいと考えています。

「これからも機能改善が進めば、将来は販社だけでなく、生産拠点や本社もSAP S/4HANA Cloudで統一していけるのではと考えています。SAPが注力している分野でもありますので、今後もシステムの進化を見極めていきたいと思えます」と期待を語る萩原氏。

今回のSAP S/4HANA Cloud導入で、同社のDXは価値ある第一歩を踏み出すことに成功しました。この新たな成長基盤は、今後のビジネスの成長に大きな可能性をもたらすはずです。

「SAPからの話を聞けば聞くほど、**SAP S/4HANA Cloud**が**私たちの目指す目標によりフィット**していることがわかりました。導入パートナーと実施したPoCの結果も、期待以上のものでした」

萩原成紀氏  
第一稀元素化学工業株式会社  
ICT統括室 室長